

故牧野先生のこと

麗澤大学経済学部教授
大塚 秀治

私はあの日、二月十日を忘れることはないでしょう。それはあまりに突然やってきました。それは、牧野先生の様子がいつもと違うことに気づいてからほんの三十分ほどのことでした。その日は、都内で校務に関する会合に参加していました。その会も終わりに近づいた頃、体調不良を訴えられたのです。その会合のあった場所から、病院へ向かうタクシーの中で突然牧野先生は意識を無くされました。すぐに救急車で近くの慶応病院に搬送され、できうる限りの救命措置が行われましたが、その意識は戻ることはありませんでした。急性心不全でした。一緒に居た私がもう少し早く判断していれば、もう少し早く対処していればと今でも悔やまれてなりません。

常々、学生に自己管理の大切さを熱心に説いていた牧野先生ですが、多忙を極めていた本人の知らないところで、体の異変は本人の自己管理の範囲を越えて進行し蓄積していたのでしょう。あらためて思い返してみると、牧野先生が亡くなる前の数ヶ月間は、体の不調を訴えることが多かったように思います。その都度、病院での検査を勧めていたのですが、締め切りが重なる仕事も多く簡単には休めないと言っていたことが思い出されます。もう少し病院へ行きやすい環境を作れなかったかと、そのこともやはり悔やまれてなりません。

牧野先生はもともと心理学を専攻しており、大学院生時代に事象関連電位という脳波を用いる手法で、人間の脳内の情報処理の側面を探ることをテーマにしていました。人間が判断を行う際に脳電位が変位する性質を用いて、認知的情報処理の側面を明らかにすることを目的とした研究です。その頃、ほとんどの実験はマイクロコンピュータによって自動化されたもので、当時としては他に例の無いユニークな研究手法でした。コンピュータを用いることでリアルタイムに脳波を処理し、ノイズなどで無効となった測定を繰り返すことが出来る画期的なものでした。そのために脳波を処理するコンピュータと実験を制御するコンピュータの連携が必要になるわけですが、複数のコンピュータを相互接続し分散処理を行って、実験を制御したわけです。それは、まさに現代のLANの原型と言えるものでした。このシステムこそ、牧野先生とコンピュータネットワークとの関わりの原点だったといえるでしょう。その後、ITベンチャー企業での勤務を経て一橋大学情報処理センターへ移りました。一橋大学ではキャンパスLANの整備と同時にJAIN・TRAINといった学術ネットワークの活動に参画し、その普及に大きく

貢献されました。麗澤大学に国際産業情報学科が設立される際に一橋大学より移籍し、麗澤大学の情報環境の整備を行うとともに、情報教育の充実のために尽力されました。また、柏地域の学校教育ネットワークを運用する、地域貢献型ネットワークである柏インターネットユニオン、略称 KIU の技術部会長として活躍されてきました。小中学校にネットワークを学生ボランティアの手で作るネットデイ活動にも参画され、ゼミの学生諸君とともに多くの学校に情報基盤となる校内 LAN をプレゼントしてきました。

かつてインターネットの世界には「走りながら考える」という用語がありました。インターネットの発展があまりにも速く、社会の制度が追いつかないためでした。あらためて振り返ると牧野先生はインターネットの拡大とともに「走りながら考え続けて」きたのだらうと思います。ゆっくり休むことも、息を抜くことなく尽力し続けてくれたのだと思います

そんな多忙な牧野先生の夢は自家用飛行機の操縦免許を取ることでした。まず練習生になるために、航空無線の免許を取る必要があるとのことでした。そのために3月の週末に講習を受ける予定だったようで、それが多忙を極める校務の中での唯一の楽しみだったようです。倒れられた日は、丁度会合のためにネクタイもしているし、航空無線の申請書に貼る証明写真を撮りに行くつもりだとうれしそうに話してくれました。その写真のCDが研究室に残されていました。それが本誌にも掲載された遺影となってしまいました。ネクタイも上着も、最後の日の服装のままなのです。

「ここは空が近いから好きなことに専念できるぞ」とうような声が聞こえそうです。ようやく自分のために時間を使えるようになったのではないのでしょうか。

今、牧野先生のゼミだった学生は先生から与えられていたテーマの実現に取り組んでいます。牧野先生が与えたテーマは「ネットワークを技術を使って遠隔から自宅で留守番している猫に餌を与える」というものでした。猫の飼い主がいなくなって少し趣旨は変わってしまいましたが、学生は頭を悩ませながらも熱心に取り組んでいます。学生がシステムの構築に行き詰ったらぜひとも遠隔からアドバイスして欲しいと思います。学生諸君もそう願っています。

牧野先生はこれからも我々の心の中で生き続けてくださるのだと思います。